

ジェンダー2

■男同士の絆1

で、男性学の話なんですけど、ちょっとこれも補足しておきますと、男はいつ男になるかっていうと、さっきいった通りまず第一に、女との関係においてですね。ですから、性的存在としての男や、私的領域の男だけが男性学の対象になってきたわけですが、そう言えば言うほど、公的領域のなかの男は、手つかずになります。

「ボクたち公平にふるまってるよ？公平中立にふるまってるよ？君たちも同じルールで、ここに、このゲームにはいつか来たら、同じようにつきあって、とりあつかってあげるから、同じようにふるまえよ」

というルールそのものが、実は構造的・組織的に女性を排除するようにできている。これは誰に都合のいいルールか、ということ、点検していく必要がでてきたわけですね。もう一つは、男は単に、女との関係においてのみ、男になるわけではありません。男同士の関係において、男は男になるんだっていうことが、女性学、ジェンダー研究から明らかになりました。それを明らかにした人が、セジウィックっていう優れた研究者です。バトラーと並んでポスト構造主義の、クィア理論の理論家ですが、彼女が作った非常に重要な概念に、**homosociality**、という概念があります。**homosexuality** と区別した、作られた概念ですが、**homosociality** をどう訳せばいいかわかりません。日本語でどう訳されてるか、まだ定訳がないので、カタカナでホモソーシャリティといっていますが、簡単にいうと、男同士の絆、と訳するのが一番です。**Male bond**、です。

「男たちは、「ホモ」っていわれると、「ゲッ！」って言って嫌がるくせに、女好きの顔して女の尻を追いかけるくせに、実は、女性蔑視をしている。では、男同士の連帯をがっちり作っているように見えるが、なぜなのか？」

という問いに、答えたのがセジウィックでした。彼女の著書に、「**Between Men**」という本があります。男の謎を、女が解いたんです。

■男同士の絆2／「負け犬の遠吠え」の謎

これがこの図なんですけど、楽しげでしょう？セジウィックが描いたんじゃないよ、私が描いたんだよ？（会場：笑）セジウィックのことを絵にするとこうなる。

「わぁ、わかりやすいなあ」

と自分で感心してるんですけど。（会場：笑）じゃどうということかっていうと、男は、男同士の世界のなかで、生きている。女は、男とつながることによって、自分の居場所を与えられる。で、男はこのなかでなにをやっているかという、男は男との間に生きる。女は男との間に生きる。このなかで、男同士でやっているゲームのことを、覇権ゲーム、といいます。**Power game** です。このゲームのプレイヤーとして男は参加します。このゲームに入れてもらえない、女々しい、卑

怯な弱虫っていわれることが、彼らにとって、最大の侮辱です。こういう女性化、feminizationが、男にとって最大の侮辱です。「オカマ」といわれるのが彼らにとって最大の侮辱なのはそのせいです。そこで、彼らが男は男との間で生きるというときに、男は女から男として認められてほしいのかというと、そうじゃないです。女によって男として認められてもらう以上に、彼らにとって大事なのは他の男からこうしてもらおうことが、最大の報酬です。なにか。

「おぬし、できるな。」(会場：笑)

この一言です。そうでしょ？思い当たるでしょ？胸に手を当ててごらん下さい。そうするとね、この秘密ってなるほどって思う。これで私はですね、酒井順子さんのベストセラー「負け犬の遠吠え」の謎が解けたと思いました。セジウィックが解きました、それはなにかって言うと、男にも女にも自分自身で獲得した価値と、異性から与えられる価値とがある。男は、自分自身が獲得した価値によって評価されるが、女は、男との間に生きるというのは、自分自身で獲得した価値よりも、男から与えられる価値のほうが、より価値が高いと考えられている。男に選ばれるという価値のほうが、自分で獲得した価値よりも高い。だから負け犬は、例えどんなにキャリアがあり成功してしようが、男から選ばれない限り、男から選ばれた女に対して、自分を低く見なければいけない。それと男はお互い競いあっている。これはなぜか、男は、覇権ゲームのゲームプレイヤーだからです。で、そこから排除されることが彼らの一番の恐怖です。

で、女はなぜ連帯できないかという、これを見てください。女は男に選ばれるのを、待っています。ところが女のなかには、男に選ばれる女と、選ばれない女がいます。そうすると女同士はお互いに、敵対関係、潜在的な敵対関係におかれている。したがって、女性がやっているのは、お互いを出し抜くゲームです。合コンに行くときに、友達を誘っておきながら、できるだけ自分よりも、かわいくない子を誘うとかね。(会場：笑) そういうことをやる。で、これが出し抜きゲームってやつです。

そうすると、私がいま説明したような非常にクラシックな、ある意味非常にクラシックなジェンダー理論なんですけど、「負け犬の遠吠え」のような本が21世紀の日本で流行るということ自体が、このような構造が、このようなジェンダー秩序というものが、今日の日本においても、綿々と続いているということをやによりも証明していることになります。

■「軍隊の男女共同参画」はフェミニズムの究極のゴールか？

女もどんどん強くなっていると考えられるにも関わらず、「負け犬の遠吠え」のようなものがいまでも流行ってるんですけども、じゃあ女が男並みになりたいのかといえ、私はそれを誤解だとはっきり申し上げました。そのときのゴールは何なのか？最近日本では、男女共同参画、というのが流行です。男女共同参画、これも同時通訳の人がなんとお訳しになるのか、私気にしてるんですが、実は、男女共同参画の政府による正式の英語訳は、単に **gender equality** なんですよ。彼らはなにをいうかっていうと、

「男女平等がゴールであり、男女共同参画はプロセスである。」

といってるんですが、これは英語訳すると、

「gender equality がゴールであり、gender equality がプロセスである。」

となるから、まったく意味を成しません。

で、なぜ政府がいま男女共同参画って言葉を使うのかっていうと、とても理由がはっきりしています。政府財界のオジサマ方は、平等と、自由と、市民という言葉が大嫌いなんです。でも、あらゆる分野での男女共同参画が進めば、男だけの世界の最後の聖域がなくなる。女性を組織的構造的に排除する最後の聖域が、軍隊だと考えられてきました。軍隊は、卑怯者と女々しい男を責め、追い落とす、男らしさの学校と呼ばれてきました。それは、殺人訓練場、ですね。そこでついに、私たちが見たものは、あのイラク戦争で、アブグレイブ収容所囚人虐待事件に加担した、女性看守、だった。女性兵士。

「女もまた、男がすなることをする。このことを称して、ジェンダー平等というのだ」

と解釈した、ある男の哲学者がいます。で、あの私はそれは論理的に間違いだということを書きほど反証しましたが、繰り返し繰り返し知的な男も知的でない男も、このような誤解をするっていうのは、ジェンダー平等について、男という生き物がいかに想像力を欠いた生き物か、つまり、自分をスタンダードにしか、自分のようになりたい女たちとしてしか、ジェンダー平等を考えることができないという、彼らの想像力の不足を意味しています。で、その人はこう言いました。

「男女平等とは、愚行権すら平等に分け与えることをいう。」

囚人虐待なんて、やりたいわけじゃないですよ。お国に命じられた殺人なんて、好きでやるわけじゃない。どう考えたって愚行です。戦争という行為はどう考えたって愚行ですが、その愚行すら平等になるのが男女平等だ、という考え方。私が言ったんじゃないんですよ、私はフェミニストでそういうことを言った人を知りません、けれども、ある男の倫理学者が名前を言ってもいいんですかね、あの、そう言っていた人がいます。そうなるとうちも私たちはいつでも、こういうジレンマに立たされます。

「男並みに平等を求めて、男のすなる馬鹿げたことも、過労死や、戦争のような馬鹿げたことも一緒にやるのか。それとも、そんなのやだよ、ということで、女らしい場所にとどまって、二流市民に甘んじるのか」

あれか、これかの、ジレンマに立たされます。私はいま、わりと極限的な例を挙げました。女も戦争に行くのか。女も銃をとって人を殺すのか。女も敵の捕虜の虐待に関わるのか。これらは極限的な状況でイエスカノーかをさぐる問いに思えますが、実はとんでもない質問じゃない。というのも、私たちは日常のなかで常に直面しているからです。つまり、あなた方が、大学をでて職場に行くときただちに、一般職か、総合職かをただちに選ばせます。つまり私生活を破壊して、過労死するほど男並みに働いて、男並みに昇進したいのか。それとも、補助職にとどまって、女並みの待遇に甘んじるのか、どっちにするよ？このジレンマに、さらされています。ですからさきほどは、極限的なケースを挙げましたが、実は私たちの日常とそのまま結びついているわけです。

■ネオ・リベの罠

こういうことを考えると、おい待てよ、というふうに思います。これってなにかおかしくないか？あれかこれかという、どちらも嬉しくない選択肢を選ばされるのが、これがネオリベの罠というものなんです。

ネオリベってなあに？かわいく聞こえるけど実は、「ネオリベラリズム」の略称です。ネオリベこと小泉構造改革は、実は、「20年遅れのサッチャー革命」といわれていますが、これはどういうものか。ネオリベの原則というのは、優勝劣敗。できるあんたが報われ、できないあんたは劣位に甘んぜよ、というルールです。自己決定・自己責任です。

「選んだからにはつべこべいうな、自分でイラクに行って人質になった、政府に救出なんて求めるな」

です。これがネオリベの原則です。この原則に私たちはまきこまれています。あなた方も相当ネオリベだと思っよ、頭んなかは。アメリカは、ネオリベの元祖です。頭んなかはリベラリズム、ネオリベラリズムでいっぱいになっている。頑張ったら報われる。報われなかったのは頑張らなかつたからだ、と、多分思っているらっしゃるでしょう。どういう人が、どういうルールのもとで頑張れるのか。どういう人には、頑張るチャンスすら与えられず、あるいは頑張るといふことに、どのような罠が待ちかまえているのか、ということ、あまり考えたことがないかもしれません。

いま私たちが直面しているのは、こういうことです。ジェンダー、ジェンダーといつて、男女格差をジェンダー研究は問題としてきましたが、いまは、女同士の間の格差、つまり女の間に選択肢が増えたかのように見えるために、自己決定・自己責任が女性に問われ、結果として、女の間の格差が拡大する、という傾向です。

だけど、これは私たちの望んだ結果だったのか。このルールはいつたい、誰が決めたのか。誰にとって、有利なゲームなのか。こうやって振り落とされていくのはいつたい誰か？子どもを持ったとたん、あるいは障害児を持ったとたん、あるいは体が弱い人が病気になったとたん、このシステムからは振り落とされていきます。

「こんな世の中じゃ、子どもなんか足手まといだから産んでられないわ。ひとりはいきおいで産んだけど、ふたり目はとても産んでられないわ」

って日本の若い女が思うのは、無理はありません。私は少子化は当然の帰結、このような社会のもとで、女は「やーめた、こんな割の悪いこと」、っていう、ある集団無意識による答えです、と、思っているくらいです。

そうすると、これは誰にとって有利なルールのもとのゲームなのか。

「こんなゲームやってらんないよ」

と、やっぱり言うべきですね。だとしたら私たちにとってとても大事なものは、いまある男仕立ての社会のなかに、

「あんたの言う通りのルールに従ってそれに頭さげてしっぽ振って、言う通りに働くから、おんなじように扱って」

という風に入っていくのじゃなくってね、

「変だよこんなルール、ゲームの、設定自体が間違ってるよ」

ということを書いていく、ルールを変えるってことを考える必要がある。そこまで私たちは来ました。ですからジェンダー研究っていうのはね、ローカルな、局地的な学問じゃないんです。社会全体を、システム全体をまるごと相手にして、

「おかしいよこんなの、ルールが変だよ」

それこそオペレーションシステム、単なるソフトじゃなくてOSにまでせまるような、そういう非常にチャレンジングな、スケールの大きい学問だ、っていうように、思ってくださいたらとっても嬉しいです。

で、そういう学問は、30年前にはなかった。いま成長産業ですから、皆さん方に入ってきていただきたいんです。こういう話をすると、ずっとジェンダーの話ばかりで、セクシュアリティの話がうまくつながらないので、このあと少し、セクシュアリティのことにいきましょう。